

琉球の伝統的集落景観とその構造

— 古宇利島を事例として —

松 井 幸 一 ・ 高 橋 誠 一

The appearance of traditional villages and structures in Ryukyu

— The Case of Kouri Island —

Matsui Koichi TAKAHASHI Seiichi

The Kouri Island villages have a long history dating from the times of the Ryukyu kings. Due to their characteristic of being on a remote island even today they have a traditional village appearance. This paper looks at their traditional house appearances and village layouts, and analyzes the special features of the appearances of the villages and the appearances that are traditional for this geography by studying the makeup and structure of each house and the distribution of the kinds of building-lot layouts in the villages. The houses tended to be always one-storied with additional attached subhousing. Many of the houses were protected from strong winds by a walled compound and typhoon blocking trees. The distribution of the walled compounds was uneven and had a strong relationship with the location of sacred spots. This case study shows that the site location of sacred spots and the shape of the housing had a mutually strong effect on each other. When the kinds of building-lot layouts is looked at, the western and eastern parts of the villages have mostly mixed layout types while the central section usually has building lots lined up in a single row. This distribution shows that even inside the village the western side is older. This fact is confirmed by the fact that old roads that twist and criss-cross are also concentrated on the western side. This research made clear the fact that Kouri Island still keeps the appearances of traditional villages. From now on, we strongly hope that the preservation and maintenance of traditional village appearance is done in parallel with the development of tourist attractions.

I. はじめに

(1) 研究目的

琉球一帯では他地域にはみられない、拝所と呼ばれる聖域が存在する。古宇利島にも「七森七嶽」と呼ばれる拝所があり、7つの御嶽¹⁾が存在する。1713年に編纂された琉球王府による初の地誌『琉球国由来記』にはこのうち3つの御嶽が記され、古くから御嶽が存在していたことが確認できる。御嶽と集落の関係についてはこれまでに合併集落において元集落の数と御嶽の数が一致することから、一集落に一御嶽が存在することが指摘されている²⁾。この原則からすれば、古宇利島には7つの集落、あるいは集落と呼ばれる以前の小集団「マキ」や「マキヨ」³⁾と呼ばれた個別の血縁集団があったと推測される。また、『琉球国由来記』に記載があるサウ嶽御イベ（現在のソウヌ御嶽）付近にアサギマガイ、ウイ（ナカ）ヌアサギ、ヒチャバアサギ⁴⁾の地名があることなどから、少なくとも2つの集落レベルの合併があったとみられている⁵⁾。つまり一集落に一御嶽が原則の御嶽の近辺に複数の血縁集団の祭祀空間が存在するため、2つ以上の血縁集団が合併したと推測することが可能なのである。したがって、現在の古宇利集落は行政単位としては一つの集落であるが、元来は複数の血縁集団によって構成された合併集落であったといえる。

現在の古宇利集落は古宇利大橋に近いこともあって、集落内にはペンションやカフェテリアなどの新しい形態の家屋がいくつか建設され始めている。すでに大型バスによるツアー観光が始まっているように、古宇利大橋の開通によって今後、ますますのリゾート開発がおこなわれていくと考えられる。それは古宇利島の活性化に繋がるとともに、これまで安易に来ることのできなかった観光客が流入することによって少なからず地元住民の生活は変化し、離島という特性から残されてきた歴史景観が失われる可能性も併せ持つ。古宇利島では3つの御嶽の存在

1) 御嶽は集落の守護神を祀る聖地で、村建ての神や祖霊神が祀られ祭祀がおこなわれる場所である。その他にもニライカナイ（東方の海の彼方にあるとされる楽土）の神などを祀る御嶽も存在する。

2) 仲松弥秀『神と村』梶社、1990、43-47頁。

3) 琉球のマキ・マキヨあるいはマキヨと呼ばれた古代集落は一般に①「同一血縁団体と、その村落名」または②「同一御嶽の祭祀集団」として理解されている。①伊波普猷・東恩納寛惇・横山重編『琉球史料叢書第二』名取書店刊行会、1940、15頁。②仲松弥秀『古層の村 沖縄文化論』沖縄タイムス社、1977、139-155頁。

4) アサギまたはハサギとは神アサギのことで首里王府編纂の『琉球国由来記』『琉球国旧記』などには神アシアゲと表記されている。そこは血縁集団が御嶽の祭祀をおこなう祭祀空間である。

5) 古宇利誌編集委員会編『古宇利誌』今帰仁村農村環境改善サブセンター、2006、47頁。



図1 古宇利島の位置

が『琉球国由来記』に記されていることから、その集落は王府時代からの長い歴史を持ち、それを今も維持する貴重な集落である。また、離島という性格から伝統的な集落景観がよく今なおよく残っていると考えられる。そこで、本稿では古宇利島の歴史景観の中でも特に伝統的な家屋景観と集落形態に着目して、個々の家屋構成およびその家屋構造と集落の宅地割の分布を調査することによって集落景観の特徴とシマに残る伝統的地理観を考察していく。

(2) 対象地域の外観

古宇利島は今帰仁村の北東約1.3kmに位置する隆起珊瑚礁からなる島である。島はモチ形をなし、周囲が約7.9km、面積が3.0km²あり、最後部の標高は島中央部の約107mである。島の東部と北部に砂浜があり、周辺はほとんど断崖となっている。古宇利島に最も近い名護観測所の観測データを見ると、1967年から2010年まで44年間の年平均気温は22.2度、年間降水量の平均値は2131mmである。他地域に比べて台風の通過が多いこともあり、降水の多くは梅雨の5、6月と台風期の7～10月が主である。

島の土地利用は大きく分けて、南側に集落が発達し、海岸段丘の平地部分は農地として、海岸沿いや段丘の淵部分は緑地として利用されている。土地利用を「土地利用基本計画」からみると、畑(45.4%)、原野(37.3%)、森林(5.8%)、宅地(3.7%)、道路(3.2%)、他(4.6%)となっている。主な農作物はサトウキビと甘藷、スイカで、昭和30年代までは煙草の栽培もおこなわれていた。漁業はウニやモズク養殖と定置網、刺し網漁で、メアジ、メバル、鰹、鯛な

どがとれる。

古宇利島への移動手段はもともと船による交通のみであったが、平成17（2005）年に古宇利島と名護市の間に古宇利大橋が完成したことによって自動車による交通も可能となった。その結果、現在は離島ならではの美しい景観や海水浴・スキューバダイビングを目的として多くの観光客が訪れる。古宇利大橋を降りてすぐ南側の農村環境改善サブセンターにはバスが停車できる大型駐車場も整備され、バスによるツアー観光もみられるがその多くは農村環境改善サブセンター内での土産物購入と浜辺の散策程度にとどまる。

古宇利島の集落はコウリ（ムラウチ）、ウイバイ（上原）、ヒチャバイ（下原）の3つのシマ⁶⁾からなり、その中心となるのがコウリのシマである。コウリは古宇利大橋のすぐ西側にあり、2011年7月末現在で人口は384人（男216、女168）、世帯数は197戸である。世帯数は多くはないが離島だったこともあり、伝統的な家屋景観がよく残る。コウリシマ内部はさらに東のアガバリー（東組）、中央部のナハバリー（中組）、西のイーバリー（西組）の3つの組に分かれる。この組分けはウガンバリー⁷⁾（御願バリー）などの集落内行事でも重要な役割を持つ。

II. 琉球における家屋構成と集落形態

(1) 家屋構成と家屋構造

琉球の家屋に関してはすでに多くの研究があり、その中でもまず挙げられるのが建築学的視点から南西諸島の民家を考察した野村孝文の『南西諸島の民家』である。野村はこの研究の中で南西諸島の別棟型民家を対象として、その主屋とトーグラ⁸⁾の平面、家屋構造および主要な付属舎である高倉を地理的、歴史のおよび建築学的に考察し、沖縄本島の民家の特徴として、主屋の西側にトーグラがおかれ、2棟を接近させて樋でつなぐものが多く、国頭地方⁹⁾の民家はほとんど2棟が合体したものが多くを指摘した¹⁰⁾。

民俗学的視点から家屋構造を取り上げたものとしては鶴藤鹿忠の『琉球地方の民家』が挙げられる。鶴藤はこの中で民家を生活の総合体としてとらえ、主屋のみならず多くの付属舎、む

6) 琉球一帯ではシマは島を意味するとともに、出身地、村落共同体をも意味する。琉球新報社編『沖縄コンパクト辞典』琉球新報社、2003、203頁。

7) ハーリーは爬竜船での行事で、沖縄の多くの漁船でおこなわれる。その目的は豊漁と海上安全の祈願である。前掲1) 330頁。

8) トーグラは炊事場、別棟のカマヤを指す。奄美群島ではトーグラ、琉球列島ではトングワ、トーヴァ、トーラとも呼ばれる。野村孝文『南西諸島の民家』相模書房、1961年、20頁。

9) 国頭地方は沖縄本島の北東部を指す。

10) 前掲8) 54-56頁。

ら仕事としておこなわれる建築、屋根葺作業、それにまつわる民族的なものまで詳細に考察している。この中で鶴藤は屋根の形態について触れ、主屋と炊事場（トーグラ）は草葺屋根も瓦葺屋根も「寄棟型」であるのに対して、牛小屋、馬小屋、山羊小屋、さとう小屋、作小屋などは簡素な建物となっていて、「切妻屋根」が多いことを指摘している¹¹⁾。

さらに、近年では坂本磐雄が琉球各地で家屋配置、主屋一番座の位置、門の位置、宅地割の形態、家屋構造など多くの項目にわたって調査をおこない、その著『沖縄の集落景観』において総合的な集落景観についての比較考察をおこなっている。坂本は主屋と付属屋の関係について付属屋の位置は敷地の形状に影響を受け、主屋の下手であることを原則としながらも、横長の敷地の場合には側面に、縦長の敷地の場合には背面に配置されることが多くなり敷地が狭いものほどその影響が著しく、風呂場が排水条件によって分散する以外は付属屋の種類によってほぼ一定の場所に配置されることを指摘している¹²⁾。

(2) 集落形態と集落構造

集落構造については地割についての研究が多く、琉球一帯でみられる計画的基盤目型の地割について数々の考察がおこなわれてきた。その中で仲松弥秀は古琉球¹³⁾の平民百姓集落はそのすべてが塊状形態をとり、開墾村では主に散村的形態をとることを指摘した。仲松によれば、塊状形態をなす平民百姓村にもいくつかの形態があり、大きく分けて自然発達の「不整然」形態、整然と並ぶ「ゴバン型」形態、両者の混在する併在型の3タイプがある。さらに併在型は「不整然」形態に小規模な「ゴバン型」が付属している形態、「不整然」形態と「ゴバン型」形態が半々の形態、「ゴバン型」形態に小規模な「不整然」形態が付属する形態など程度に応じて様々に分類される¹⁴⁾。

「不整然」形態と「ゴバン型」形態の2つの異なる集落形態が発生した要因は琉球の地割制度の導入にあり、地割制度が導入される1737年を区切りとして導入前後で「不整然」形態と「ゴバン型」形態に区分できる¹⁵⁾。地割制度が制定される前後の集落形態の特徴としては以下のことが指摘されている。(1)地割制以前からの村落はその共同体の主体部、言いかえると旧家地域や拝所地域の部分が「不井然」形態をなしている。(2)地割制時代のものは2種に区分され、地表

11) 鶴藤鹿忠『琉球地方の民家』明玄書房、1972、26-27頁。

12) 坂本磐雄『沖縄の集落景観』九州大学出版会、1989、30頁。

13) 本論での古琉球の定義は農耕社会の成立から島津氏の琉球征伐（1609年）までの期間とする。

14) 仲松弥秀『古層の村 沖縄文化論』沖縄タイムス社、1977、86-87頁。

15) 前掲14) 111-119頁。

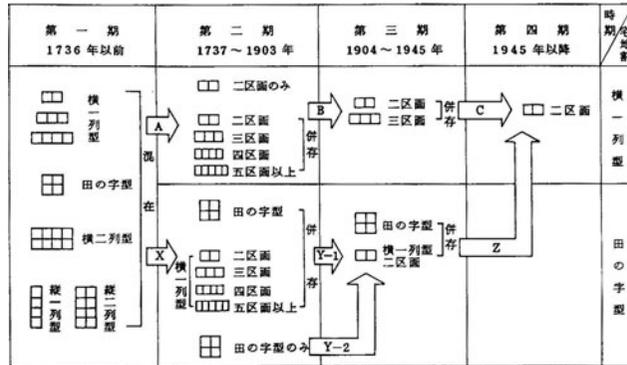


図2 宅地割の変容過程

坂本1989, 112頁より引用。

面が平滑地をなしている地域の村落は碁盤型形態，そうでない場所のものは「不井然」形態をなす。(3)地割制廃止（1903年）後の現代では再び「不井然」形態となっている。(4)旧家や拝所地域を有する地域が集落の発生地域である¹⁶⁾。つまり，簡潔に言えば地割制度が制定される前から存在する，古い自然発生型集落の集落形態は「不井然」形態であり，地割制度が制定された後の新しい計画的集落では碁盤型の集落形態であるといえる¹⁷⁾。

仲松の「不井然」と「ゴバン型」の2つの集落構造を踏まえ，坂本はさらに規則的宅地割の変容を調査し以下の6つの特徴を指摘した¹⁸⁾。(1)現状における沖縄全域の集居集落で，規則的宅地割り形態をとっているものは五割を占める。(2)規則的宅地割の中では，横一列型がほとんどを占める。(3)横一列型の中では，画地数が2～4までが多数であり，5以上は少ない。(4)横一列型宅地割の計画的発生時期，および，格子状の道路配列と規則的宅地割の両者が同時に行われる時期は，ともに1737年と考えられる。(5)規則的宅地割は，横一列型と田の字型の二系列が，各二段階の変化を経て，最終の横一列型二区画の形態に至っている。(6)宅地形状の変容過程も，ほぼ規則的宅地割の形態変化と対応する。正方形に始まり，次に横長と縦長の混在を経て，最終の横長に至っている。これらの特徴を図で表したのが図2である。すなわち仲松と坂本の考察を踏まえれば，「ゴバン型」集落構造と横一列型宅地割は1737年以後に発生し，この契機となるのが首里王府の地割制度の導入である。

16) 前掲14) 125頁。

17) 地割制の導入時期に対しては諸説あるが，「不井然」形態がゴバン型より古いのは仲松の集落形態調査より明らかである。①前掲14) 115-118頁。②田村浩『沖縄の村落共同体論』1979，至言社，328-332頁。

18) 前掲12) 96-115頁。

Ⅲ. 古宇利集落の家屋と集落形態

古宇利島の中で集落と呼べるほど家屋が密集している箇所は島の南部のみである。集落は古宇利大橋が架かる以前は交通が不便だったこともあり、今なお歴史景観を維持し伝統的な家屋形態を多く保持している。本稿ではこの南部の集落を対象として家屋構成と家屋構造および集落形態と集落構造を調査した。その調査範囲は東西約750m、南北約400m、調査家屋数は132戸¹⁹⁾である。なお、調査は家屋調査表を作成し、踏査によって家屋ごとの平面図を作成した。家屋調査にあたっては今帰仁村教育委員会および地元住民の協力も得ているが、プライバシーを考慮して敷地外側からの外観調査にとどめている。

集落景観を考察するにはまず歴史的景観の重要な要素となる伝統的な家屋とはどのような形態なのかを考える必要がある。どのような形態をもって伝統的な家屋形態とするかは様々な見解があり、もちろん琉球王府時代には現在のコンクリートを使った家屋は存在しないし、瓦葺きの屋根も一部の寺社や上位階級の者にしか許可されていない。そのため、現在いわゆる沖縄の風景として画一的にイメージされるような赤瓦屋根の低層住宅をもって伝統的家屋ということとはできない。琉球の伝統的な家屋形態を考える際には現在みえる家屋形態のみにとらわれず、文化・地域性をも考慮して別の側面から考える必要があるだろう。

地域性から伝統的家屋の形態を考えると、前述したように琉球の家屋は南西諸島の家屋形態とよく似ていることが挙げられ、野村は南西諸島の家屋は原則として主屋と炊事場（トーグラ）の2棟からなると指摘する。本稿の調査では敷地外からの外観調査にとどめているため、各棟の機能についてはまでは把握することができないが、景観を主題としているためここでは別棟の機能にはこだわらず、家屋構成の点から主屋とは別に付属屋を持つ家屋を伝統的な家屋構成としたい。さらに伝統的な家屋の構成要素として重要なものが「屋敷囲い」の有無である。琉球の伝統的集落では一般的に集落全体を木々が「抱護」する「抱護林」が存在する。その役割は実質的な防風や防潮とともに風水思想にもとづく。その「抱護林」の考えを個々の屋敷地に適用したのが「屋敷囲い」である。屋敷囲いに使われる材質にもいくつかの種類があり、「抱護林」同様に木を植樹したり石垣で屋敷地を囲むのが一般的であるが、トタンを用いて屋敷地を囲む事例²⁰⁾もある。さらに防風のために石垣を築く「屋敷囲いとしての石垣」も伝統的な家屋

19) 家屋調査にあたっては住居を対象として、小学校や倉庫など住居以外の家屋は除外している。

20) 筆者らが2007年に今帰仁村今泊集落で「屋敷囲い」を調査した際には、集落全体の約5分の一の屋敷地が「屋敷囲い」にトタンを取り入れていた。高橋誠一・松井幸一・松井僚平「今泊の集落景観と保全」（沖縄県今帰仁村教育委員会編『今帰仁村文化財調査報告書第25集 今帰仁城跡発掘調査報告書Ⅲ』沖縄県今帰

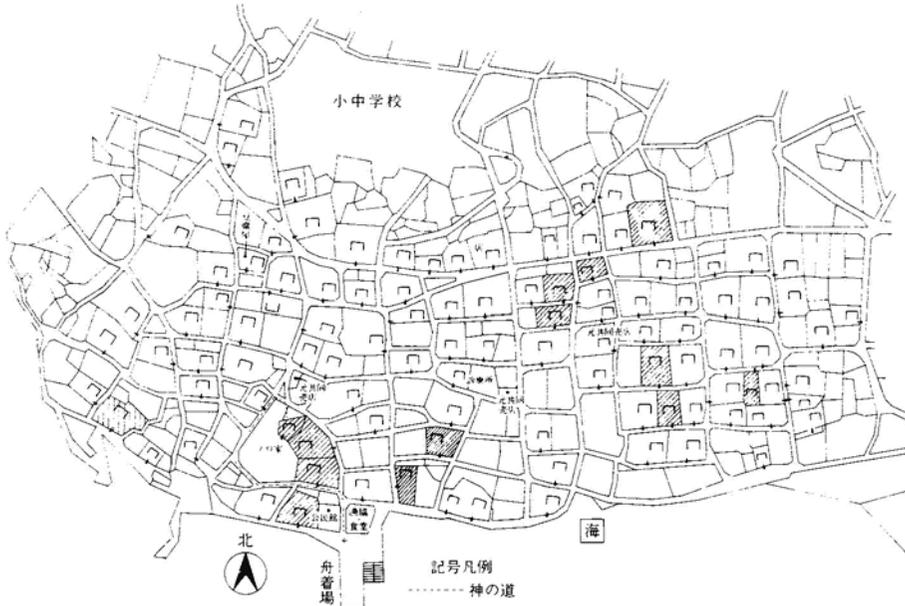


図3 坂本による1974年時点の家屋調査
坂本1989, 219頁より引用。

構成の一つで古くからの文化である。「屋敷囲い」を文化として捉えた研究では、例えば石垣を通じて地域差を明らかとして文化領域を総合判断しようとする事例などがある²¹⁾。現在はさらに建築の容易さから石垣からブロック塀やコンクリート塀へと移行する家も多いが、そこには依然として文化としての「屋敷囲い」が根付いているといえる。

本稿ではこのような伝統的家屋を構成する要素を踏まえて、主屋とは別に付属屋を持ち、敷地周囲を抱護するように木々が植えられ石垣で囲まれる敷地、そして家屋構造からいえば平屋建てで、寄棟造りのように屋根に勾配をもつ構造、このような家屋構成・家屋構造を持つ家屋を伝統的な家屋形態と定義したい。

古宇利の集落ではすでに坂本によって1974年と1988年に家屋調査がおこなわれ、住宅の向きと左一番座²²⁾の分布、諸施設の分布、屋根材質の比較、敷地囲い材質の比較、家屋構造と敷地囲い材質の関係についての考察がおこなわれている。その調査範囲は本稿の調査範囲とほぼ同

仁村教育委員会, 2008, 68頁。

21) 漆原和子『石垣が語る風土と文化——屋敷囲いとしての石垣——』古今書院, 2008年, 3頁。

22) 一番座は沖縄でよくみられる住宅の間取りで、現在の客間にあたる。神棚や床の間があり、接客がおこなわれる場所でもある。左一番座は向かって左手に一番座が位置する間取りを指す。

様で、集落の拡大はほとんどない。坂本は当時の調査で、家屋の向きがすべて傾斜方向と一致し南面すること、14戸の左一番座が存在しその要因はほとんどが信仰および隣家との関係によるものであることを集落の特徴として挙げる（図3）。また、1974年と1988年の調査を比較して屋根材質がセメント瓦とスラブへと移行し、敷地囲いの設置率が若干低下していることを指摘した²³⁾。

しかし、坂本による2回の詳細な調査からはすでに40年弱経過している。調査時と現在の家屋数を比較すると1974年が107戸、1988年が115戸、本稿の調査である2011年が132戸と若干の増加をたどっているが、その間も集落規模はほとんど拡大しておらず、増加した住居は空き地の転用が主である。家屋数に著しい変化がないとはいえ、建て替えなどによって家屋の形態は変化するため、家屋の形態を再度調査する必要があるだろう。また、坂本の調査では対象とならなかった付属屋と屋敷抱護林は琉球の伝統的家屋を構成する重要な一要素である。そこでここでは坂本の調査も踏まえながら家屋構成およびその家屋構造を考察し、40年におよぶそれらの変容も併せて比較していく。

(1) 家屋構成および家屋構造の特徴

本稿では主屋、付属屋、ヒンブン²⁴⁾の有無と材質・形態、屋敷囲いの種類（木・石垣など）について調査した。主屋と付属屋については屋根の形態から切妻造り、寄棟造り、平面系の3つに分類し、その材質も調査している。調査では調査範囲に存在する全ての家屋について悉皆

表1 家屋構成と家屋構造

家屋構成	主屋	132 (100%)
	主屋 + 付属屋	100 (76%)
	付属屋の総数	191
	屋敷抱護林	58 (44%)
	石垣	28 (21%)
	ブロック塀	113 (86%)
家屋構造	平屋建て	118 (89%)
	母屋の屋根に勾配を持つ家屋	88 (67%)

() 内の数値は全体に対する割合を示す

23) 前掲12) 217-222頁。

24) ヒンブンは門と家屋の間に設置された目隠しの衝立を指し、沖縄の民家を特徴づける要素である。素材は一枚岩・石垣・板垣などがある。悪霊を防ぐという信仰上の役割も担っている。前掲1) 360頁。



図 4 古宇利集落の家屋景観

調査をおこなった。その調査結果より作成した集落景観図が図4である。

まず始めに家屋を構成する要素と家屋構造・材質について考察していきたい。これらの要素についてまとめたのが表1である。全132戸のうち本稿で定義する伝統的な家屋（付属屋、屋敷抱護林、石垣、平屋建、屋根に勾配をもつ構造）全ての要素を持つ家屋は8戸にとどまり、その位置は集落の中央部に多かった。個別の要素ごとにみていくと付属屋を持つ家屋は全体の約76%にあたる100戸存在した。集落内の付属屋の総数は192棟で1戸当たり平均1.5棟の付属屋を持つ。さらに屋敷内に木々を植えている屋敷地は約44%にあたる58筆、石垣を持つ屋敷地は約21%にあたる28筆、主屋が平屋建てである家屋は約89%にあたる118戸、主屋の屋根に勾配もつ家屋は約67%にあたる88戸存在した。これら要素の確認からは古宇利集落の家屋の多くは平屋建てで、付属屋を持つものが多いことが指摘できる。

また、石垣を持つ家屋は少ない一方で、周囲をブロック塀やコンクリート塀で囲う家は多く「屋敷囲い」の材質は変化しても「屋敷囲い」の習慣は継承されているといえる。家屋の周囲を囲う「屋敷囲い」が今なお多く残るのはやはり一帯の台風の多さと、古宇利島が海に面し、多少の起伏を持つとはいえ風雨を遮るほどの地形を持たないことが大きいと考えられる。漆原は、藁屋根を用いる強風域では石垣を「屋敷囲い」として必要としていたことを指摘する²⁵⁾が、これは古宇利島にも当てはまる。古宇利島に最も近い名護観測所の統計によれば、2010年度の月別平均風速は5月と9月を除き3.5m/sを越え、最大風速はいずれも10 m/s以上である。さらに風向別観測回数では北、北北東、北東、北北西北西のいわゆる北側からの風が全体の約46%を占めている。したがって、古宇利島に吹き付ける風の多くは北からの風で、それを防ぐためにブロック塀やコンクリート塀でつくられた「屋敷囲い」を設置して対策をおこなっているといえる。

「屋敷囲い」の材質についてさらに詳しくみると、「屋敷囲い」の多くは単一の材質によってのみ構成されるのではなく、複数の材質を用いている。最も多くの材質として用いられているのがブロックで、ブロック塀を持つ家は113戸あり、その設置率は約86%と著しく高い。次いで多くみられるのが木々を用いるいわゆる「屋敷抱護林」である。全体の40%強の家に木々が植えられているが、筆者らがすでに調査した同じ今帰仁村の今泊集落ではほぼ全ての家でフクギ²⁶⁾が「屋敷抱護林」に使われていたことを考えると古宇利島では少ないといえる。今泊集落も古宇利の集落と同様に海岸に立地する地形ではあるが、両集落の「屋敷抱護林」設置の違いから

25) 前掲21) 3頁。

26) フクギはオトギリソウ科の常緑高木で、暴風・防火林として琉球一帯で幅広くみられる。



図5 石垣とヒンブンの分布

表2 屋敷囲いの設置率と材質別比率

箇所	屋敷囲いの設置率	材質別比率			
		ブロック	フクギ	石垣	生垣
外部	95/91	39/45	13/16	27/21	21/18
内部	96/94	21/38	19/30	31/18	19/14
計	96/91	30/44	20/18	29/20	21/18

上段：1976年，下段1988年単位（％）
坂本1989，219頁より，一部改変。

は近隣の集落でも集落ごとに「屋敷囲い」に用いる材質は大きく異なるといえる。「屋敷囲い」の材質として最も少ないのが石垣で，石垣のみで「屋敷囲い」を構成している屋敷地はない。石垣設置場所の多くは屋敷地の2面までにとどまり，その多くは道路に面した箇所，それもより交通量の多い側에만石垣が設置される。このことから石垣は「屋敷囲い」としての役割も果たすが，装飾の一部として捉えられていると考えられる（図5）。

坂本は1979年と1988年の2回の調査を比較して「屋敷囲い」の設置率が若干低下していることを指摘し，その材質ではブロックだけが増加して他の材質がすべて減少していること，設置



図6 抱護林に囲まれた集落

今帰仁村農林環境改善サブセンター2006より引用。

箇所別²⁷⁾にみてブロックは外部の比率が内部を上回り、フクギはその逆に内部の比率が外部を上回ることを指摘した(表2)。本稿の調査でもブロック塀を持つ家は113戸でその設置率は約86%と著しく高く、これが古宇利集落における「屋敷囲い」材質の一つの特性であろう。

さらに全体的にみれば本稿の調査では「屋敷囲い」がまったくない家は2戸しかなく、その設置率は約98%であった。したがって、屋敷地の何面を囲うかの違いはあるが、古宇利の集落ではほとんどの屋敷地に「屋敷囲い」が設置され、その材質としてブロック塀が多いことがもう一つの特徴であるといえる。

家屋の向きに着目すると、坂本は1974年の調査時点で107戸のうち106戸が南面し傾斜と一致することを指摘した。本稿の調査でもこの傾向は変わらずほとんどの家屋の主屋は平入り型で南面する。この要因もやはり北側からの風を防ぐため、「屋敷囲い」とともに強い北風を防ぐための伝統的景観の一つになっているといえる。

屋根型をみると古宇利集落の屋根型は大きく分けて切妻型、寄棟型、平面型の3種類に区分できた。伝統的な家屋形態では主屋と炊事屋は寄棟型である。本稿の調査でも主屋の型式は寄棟型が87棟と最も多く、次いで平面型が43棟、切妻型が2棟となっている(表3)。屋根の材質別にみると瓦葺きが最も多く121棟、次いでセメント系²⁸⁾が116棟、トタンが69棟、その他が3棟²⁹⁾であった。このうち主屋に限れば瓦葺きの家屋が89棟と全体の約67%を占め、多くの主

27) 坂本は「屋敷囲い」を道路に接する外部と、接しない内部に分けて考察をおこなっている。

28) 本稿ではセメント、コンクリート、スレートをセメント系とする。

29) このうち2棟はプレハブ小屋、1棟は木造の掘建て小屋である。

表3 屋根型と材質

場所	屋根型	屋根の材質			
		瓦	セメント系	トタン	その他
主屋	寄棟型	87	0	0	0
	平面型	0	39	4	0
	切妻型	2	0	0	0
付属屋	寄棟型	30	0	0	0
	平面型	0	77	65	3
	切妻型	1	0	0	0
	東屋型	1	0	0	0
計		121	116	69	3

屋が瓦葺きであった。一方、付属屋では瓦葺きが32棟に対して、セメント系が77棟、トタンが65棟と瓦葺きに比べて2倍以上多い。これは主屋に比べて付属屋はより簡素に建てられたためである。同様にトタン屋根が主屋では4棟とほとんど存在しないのに対して付属屋では65棟と大幅に増加するのも、付属屋の役割が主屋より低いため材質にはこだわらず屋根さえあればいいという考えを示しているのだろう。

屋根型と材質の関係についてみると、寄棟型は全て瓦葺きであるが、平面型はセメント系が116棟、トタンが69棟、その他の材質が3棟となっている。セメント系はスラブ構造をとるものが多く、坂本は1976年と1988年の2回にわたる調査で主屋においてスラブ構造が3%から17%へと大幅に増加したことを指摘したが³⁰⁾、本稿の調査ではさらに3割弱まで増加している。

家屋の階数と屋根型、材質の関係をみると、主屋では瓦を用いた家屋の多くが1階建ての寄棟型で、瓦を用いた2階建ての家屋は切妻型が1棟存在するだけである。屋根の材質にセメント系を用いた平面型の家屋では2階建てが15棟、3階建てが1棟存在し、トタンを用いた平面型では2階建ての家屋が1棟存在した。瓦を用いた家屋の多くが1階建てであるのに対して、セメント系では全体の約14%にあたる家屋が2階建て以上である。この違いは屋根にセメント系を用いた家屋の多くが風に強いことや、セメント系の多くの家屋がスラブ構造をとるために強風でも屋根材が飛ばないことなどが大きな要因になっていると考えられる。

次にヒンプンの設置についてみていきたい。ヒンプンは入口と家屋の間に設置され、目隠しとしての実的な機能意外にも外からの悪気の進入を防ぐという民俗信仰的な面を併せ持つ。多くのヒンプンは石やコンクリート、ブロックを積み重ねたもので造られるが、その他にも生

30) 前掲12) 218頁。

垣や木を植えてヒンプンの役割を担っているものがある。その形状の多くは独立した直線型であるが、門と連結しL字型をとるものもある。外からの視線を遮断する役割を担うため1m以上の高さのものが多く、重厚な存在感とともにヒンプンは琉球の家屋景観を特徴付ける大きな要素の一つとなっている。

古宇利の集落ではヒンプンを設置している家屋は全体の約7%にあたる9戸存在した。その形状をみるとL字型が1つある以外は全て直線型で、材質は石で造られたものが4つ、コンクリートが1つ、トタンが1つ、木が1つ、植物が1つ、木製フェンスが1つである。このうち石とトタンで造られたヒンプンでは前後に必ず木を植えていた。また、ヒンプンの後にタンクを置いてさらに目隠しをしている家も存在した。

ヒンプンを持つ家の構成・構造は新しいものもあれば、古いものもあり特段の特徴を見いだすことはできない。しかし、これらの家は中央の街路沿いに立地しているものがほとんどでその立地からはヒンプンを持つ家の偏在性が指摘できる。

(2) 街路形態と伝統的地理観

琉球の集落は1737年の宅地割導入を契機として、それ以前の「不整然集落」と「格子状集落」に区分される。「不整然集落」では街路は湾曲し直線的な街路はほとんど存在しない。これは中国から伝来してきた風水思想に加えて、琉球独自の地理観を基本理念とし、直進しかできいとされる悪気の進入を円形もしくは楕円形の区画の配置によって防ぐためである。さらに伝統的な集落では街路の接合点を直線で結ばず、あえて食い違いにする場合が多々ある。これも直進する悪気を食い違いによって進入を防ごうという考えからおこなわれるものである。

筆者らは古宇利集落において石敢當³¹⁾の分布を調査し、その報告を別稿においておこなっている³²⁾。石敢當は一般的にT字路や行き止まり、または食い違い交差点に設置され、その多寡は集落において伝統的地理観がどの程度維持されているかや「不整然」な集落街路を示す指標となる。したがって、石敢當は魔除けであるとともに、伝統的地理観をあらわす表象ともなり、その分布からは集落住民の抱く地理観が見て取れるはずである。そこで、ここでは集落内の街路形態と石敢當の分布から集落における伝統的地理観を考えていきたい。

31) 石敢當は石に「石敢當」の文字を刻んだ魔除けである。中国を起源とし、直進する悪気を防ぐものである。石の形は円形から人型の自然石まで様々な形がみられ、刻まれる文字も「泰山石敢當」や「石敢當」、梵字などいくつかある。現在は長方形の石に「石敢當」と刻まれた既製品が多い。

32) 高橋誠一・松井幸一「神の島・古宇利島の集落と伝統的地理思想——琉球としての再認識と強調——」東西学術研究所紀要第四十五輯、2012。



図7 湾曲街路と石敢當

図8は集落内部の街路を対象として³³⁾街路の接点間を一つの街路とし、接点間に穏やかに屈曲する歪曲部を持つ街路、街路間の接点が食い違いになっている箇所、さらに石敢當の分布を示したものである。まず仮に集落内を東部・中部・西部の3つに区分し、湾曲する街路の分布をみるとその多くが集落西側に偏在していることが指摘できる。集落東側にも若干の湾曲街路がみられるが、その数は少なく東側に比べると湾曲度も小さい。さらに集落全体で食い違い点は14箇所確認できたが、それらの多くも集落西側に偏在していた。湾曲街路と食い違い点が琉球の伝統的な地理観を示すものであることを踏まえれば、このような分布は古宇利集落において集落西側の方がより古い起源であることをうかがわせる

次に集落内の石敢當の現状をみると、集落全体には49基の石敢當があり、約6.3戸に一つという割合で設置されている。これは他の琉球地域に比べてもはるかに稠密で、その設置場所もほぼ例外なく道路の突き当たりの地面に接した位置に設けられ、石敢當の持つ意味を正確に理解し設置しているといえる³⁴⁾。石敢當の分布は西部に25基、中央部に9基、東部に15基あり、湾曲街路と同様に西部に多くみられる。その多くは1980年代以降に新しく設置されたものであるため、

33) 本稿では湾曲部をもつ街路でも、集落外部へと続くものや家屋が面していない街路は考察の対象から除外している。

34) 前掲32)。

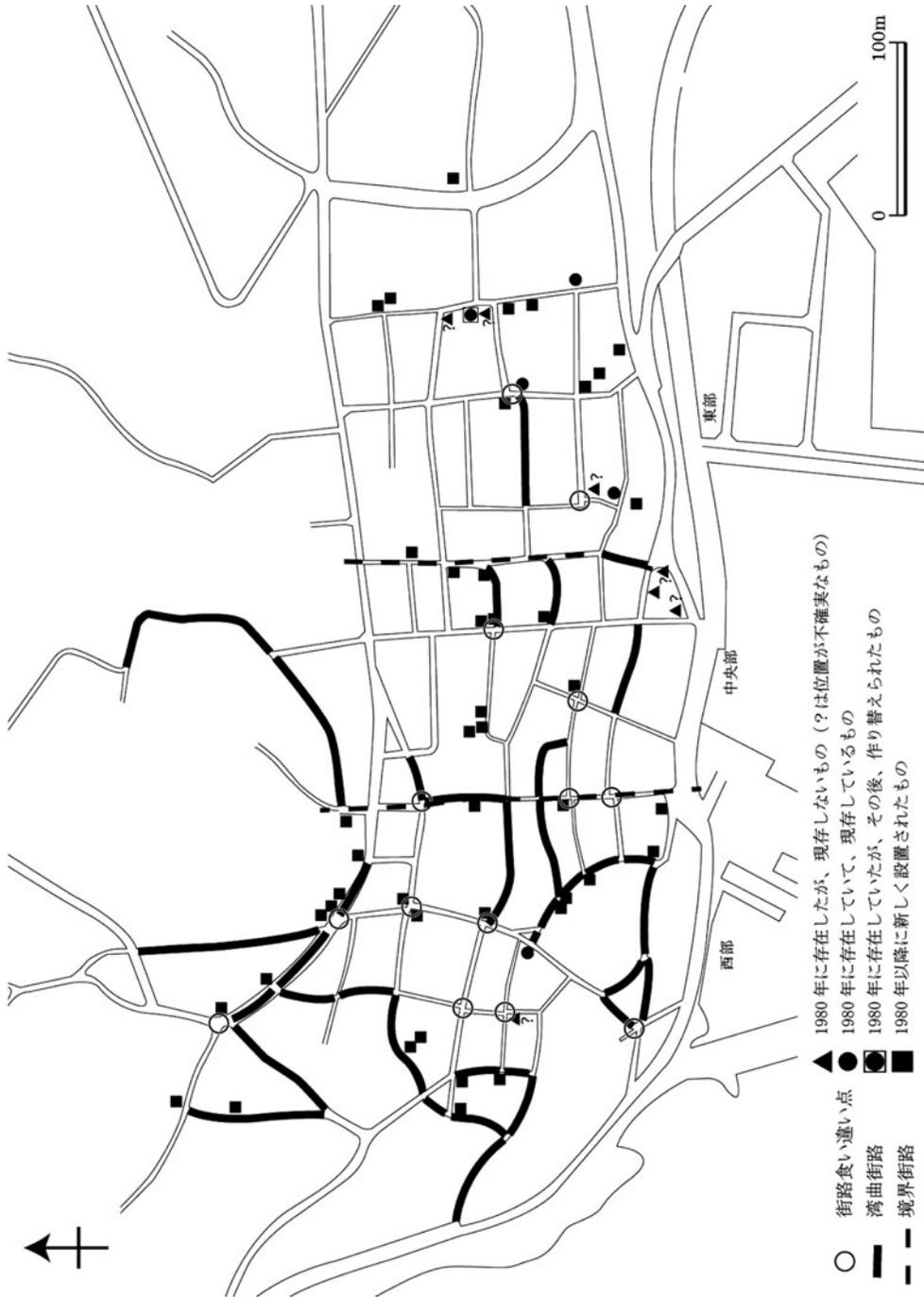


図8 湾曲街路と食い違い点・石敢當の分布

この分布から一概に集落西側に伝統的地理観を持つ住民が多いと結論づけることはできないが、一つの傾向としては起源が古いと考えられる地区には石敢當も多いという指摘が可能である。

(3) 宅地割の形態と家屋構成

坂本は宅地割の変容過程を考察し、4つの過程に区分している。その中で最も古い宅地割のタイプが横一列型、横二列型、縦一列型、縦二列型、田の字型などの混在するタイプである。このタイプは1736年の宅地割導入以前の型式で、1737年以降の第二期には横一列型の二区画や三区画が併存するタイプ、あるいは田の字型とこれら横一列型が併存するタイプへと移行する。そして第三期には横一列二区画型と横一列三区画型、または田の字型と横一列二区画型が併存するタイプへと移行し、第四期の1945年以降には横一列二区画型へと収斂していく³⁵⁾。

これまでに湾曲街路や石敢當の分布から集落西側の方がより古い事を指摘した。これを裏付けるように、西側の街区には丸みをおびた街区や「不整然」な街区が多い。宅地割りも西側街区では長方形や半円形、多角形など複数の宅地型から構成される幾何学模様となっており、宅地割は混在型である。中央部は「不整然」な街区とともに南北の街路に沿って一部、「格子状」の街区があり、宅地割では横一列型と田の字型が所々にみられる。そして集落東側でも「不整然」な街区とともに「格子状」の街区がみられ、宅地割では横一列型・縦一列型、田の字型が所々にみられる(図9)。この分布から考えると、集落西側は街区、宅地割ともに古い形態であるため集落内でも最も古い、もしくは街区の変容が少ない地区であるといえる。中央部は「不整然」な街区とともに南北の街路に沿って一部、「格子状」の街区があることから、一部では南北街路を基準にした街区割がおこなわれていたと考えられる。その傾向は東部でも同様で、街区としては「不整然」な箇所もあるが南北街路は比較的整然と並んでいることから、南北街路を基準にした街区割が意識されているといえる。このような街区と宅地割からは、集落は西側から拡大した、あるいは先にいくつかの血縁集団が西側に居住し住居を構え、その後新たな血縁集団が東側に移動し住居を構えたと考えることが可能である。湾曲街路と石敢當が集落西側に多いこともこれを裏付ける一つの証左といえるだろう。

次に街区の形態と家屋構成の間にどのような関係があるのかを考えたい。伝統的家屋は8戸のうち5戸までが横一列型の宅地割に存在する。これは比較的横一列型の宅地割が多い集落中央部に伝統的的家屋が偏在するためである。再度、街区と宅地割の形態をみると、横一列・縦一列型宅地割の全17区画のうち15区画までは2区画型で、そのうち9区画は集落中央部に位置

35) 前掲12) 102-115頁。

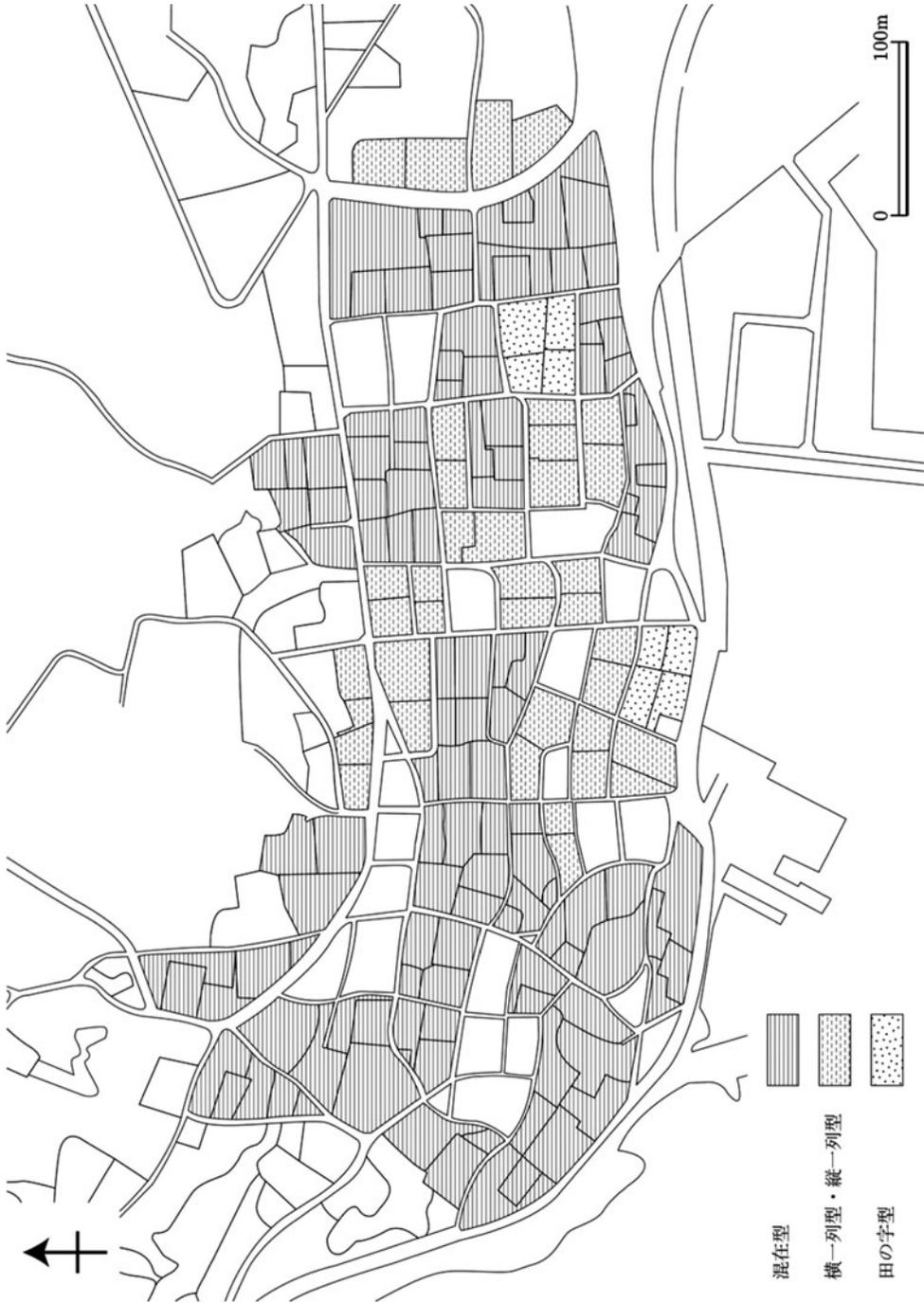


図9 古宇利集落の宅地割

する。坂本の宅地割変容過程（図2）をもとに考えれば、第一期の混在型には横一列型や縦一列型の他にも横二列型や縦二列型がみられるのに対して、古宇利集落中央部にみられる9区画はいずれも一列型である。さらに前述したように中央部には一部、「格子状」の街区がみられることから中央部の区画の一部は坂本の第二期、つまり地割制導入後に形成されたと考えられる。したがって現在、確認することができる伝統的家屋は宅地割からみれば比較的新たに形成された中央部地区に多く立地しているといえることができる。

IV. 古宇利集落の歴史的景観とその保存

本稿では家屋構成と集落形態の調査から集落景観の特徴とシマに残る伝統的地理観を考察した。以下に本稿で明らかになったことを提示しながら集落景観と集落形成過程の考察をおこない、歴史的景観とその保存について提起していきたい。

古宇利島には先史時代の遺跡が残ることから、相当古い時代から人が住み、生活をおこなっていたことが明らかとなっている。遺跡の多くは海岸部に位置するが、島の中央部でも遺跡が発見されている。これらの遺跡は古宇利島にいくつかの血縁集団が居住していたことを示し、それら血縁集団が集まり現在の古宇利集落を形成したといえる。『琉球国由来記』が編纂された1713年の時点では、記された島の御嶽の数から少なくとも3つの血縁集団の存在が推測される。本稿では取り上げることはなかったが、この3つの御嶽の位置はそれぞれ島の東部・西部・中央部とわかれている。この御嶽を中心とし、居住していた血縁集団がそれぞれ現在の集落位置へと移動したのである。その時期と規模については不明だが現在の集落形態からみれば、全体として「不整然」な街区形態をとるため地割制が導入される以前に集落の大部分が形成されていたのは間違いない。さらに宅地割の分布では集落西部と東部が混在型が多いのに対して、中央部では横一列型が比較的多く存在した。この違いからは各地区の形成年代の違いを読み取ることが可能であり、混在型の宅地割と湾曲街路が西部に多いことは集落内の中でも西側がより古いことを示している。

家屋構成と家屋構造の考察からは、伝統的家屋形態が集落中央部に偏在していることが指摘できた。中央部はムラウチの中でもナハバーイ（中組）と呼ばれて、かつてのムラヤー跡や現在の港がある集落の中心部であり、中央部に伝統的家屋が多いのは集落の中心地としての階層性の高さが一つの要因としてあるだろう。さらに別の要因としては、伝統的家屋の構成要件となる屋敷抱護林と石垣を持つ家が中央部から東側に多いことが挙げられる。古宇利の集落全体は海に面しているが、俯瞰すれば集落西部には集落抱護としての抱護林が海岸部まで植えられ海からの風を防ぐのに対して、中央部や東部では集落抱護林が少ない。したがって、西部に比

べて中央部と東部に風を防ぐための抱護林や石垣が卓越し、その結果、伝統的家屋の構成要件に当てはまる家屋が中央部に多くなったと考えられる。その集落抱護林の中に立地するのが七御嶽の一つのナカムイヌ御嶽であって、聖地の木々を伐採せずに自然のまま維持することが自然と防風林としての役割を果たすのである。したがって、古宇利集落の事例は集落における聖地の立地場所と家屋形態が深く関係することを如実に示すものだろう。また、中央部は宅地割からみて西部・東部よりも新しく形成されたと推測されるが、ヒンプンはこの地区に特に集中していた。ヒンプンは伝統的地理観を表す一つの指標でもあるので、中央部は伝統的地理観がよく残る地区であるともいえる。したがって、古宇利集落においてはヒンプンを設置するという地理観は、新たに形成された地区に流入した特定の血縁集団または地区居住者において認知されていると考えることも可能であろう。

家屋構成を個別の要素ごとにみると、9割弱の家屋が平屋建てで、主屋の他に平均して1.5棟の付属屋を持っている。また、敷地に木を植える家も全体の4割ほどにのぼる。よってこの平屋建て、付属屋、屋敷抱護林が古宇利集落の家屋景観を大きく特徴づけている。このような特徴的な家屋景観は風や雨などの気候・自然に順応するように建てられ、多くの家屋が島の傾斜に沿って南面し、平入りの低層家屋が多い。さらに樹木以外にもコンクリートや石垣などを組み合わせて「屋敷囲い」は構成されており、特にブロック塀は全体の8割を越える敷地で使われ、過去の調査に比べても急激に増加している点は「屋敷囲い」としての意味は維持しつつも新たな材質が普及していく過程を示している。

主屋と付属屋の形状と材質については大きな差がみられ、鶴藤の指摘と同様に主屋に比べて付属屋は簡素な建物が多かった。主屋の中でも平面型家屋の多くは屋根の材質にセメント系を用いたスラブ構造の家屋が多く、平屋型で付属屋を持つ家屋と並び、新たな集落景観にもなりつつある。従来の瓦屋根家屋が強風に弱いため1階建てに制限されるのに対して、平面型でスラブ構造の家屋では強い風に対しても丈夫で2階建てが可能である。これも材質・施行方法の発展がもたらした自然に対応した家屋景観の変容といえ、今後ますますこのような形式の家屋が増加すると考えられる。

以上、簡潔に本稿で明らかとなった点を挙げたが、琉球一帯の中でも特に沖縄本島とその周辺離島は観光地化が進むとともに、住民の利便性向上のためにこれまで受け継がれてきた歴史的景観の改変が著しい。古宇利島も船による往来のみであったのが、橋の建設によって観光バスの流入、観光客の大幅な増加など大きな観光地化の流れができつつあり、橋のたもとにある古宇利島ふれあい広場・ビーチでは平成17(2005)年に3万人弱だった観光客数が古宇利大橋が開通した翌年の平成18(2006)年には約12万人と急激に増加している。もちろん観光地としての

整備は雇用の増大ひいては地域の活性化に繋がるためこの流れは好ましく、今帰仁村も「第二次今帰仁村観光リゾート振興計画」において「古宇利ファミリービーチの整備」や「古宇利島探訪」を強化する必要性を打ち出している。しかし、安易に観光地化を進めることは他の観光地化した集落のように、伝統的景観を破壊し観光者が抱く「観光地としての沖縄のイメージ」に沿うように景観を造り替える危険を併せ持つ。今帰仁村も「第二次今帰仁村観光リゾート振興計画」において観光地することのマイナス効果として、住民意識アンケートの結果から「開発による自然破壊（山や海の保全）等への影響」を挙げている。振興計画ではこのようなマイナス効果を防ぎつつ、歴史遺産を活かすために①各集落の歴史・文化財等の保全・復元整備、活用②案内板・説明板の充実③歴史・文化財等の指定の強化の3つを挙げている。これらの政策は安易な観光開発を防ぐとともに、地域住民にとっても再度、地域の文化・歴史遺産を見直すことによって地域アイデンティティーの確立に繋がる重要なものであろう。古宇利島は離島としての性格から、今なお数多くの聖地や祭祀が存続し、付属屋の設置や抱護林、石垣による「屋敷囲い」などの伝統的な家屋景観、集落景観を維持する貴重な集落でもある。今後は自然のみならず集落景観もこれまで住民が生活をおこなってきた痕跡として歴史・文化遺産になりうるという意識のもと、伝統的集落景観の保存・整備が観光地開発と同時に並行的に実施されることが強く望まれる。

本稿では集落西側の起源がより古い可能性を指摘したが、集落形成過程に関する調査および考察が十分でない点は否めない。今後、この可能性を明らかとするにはさらなる考察が必要となるだろう。その一つが集落形成と「腰当」思想の関係で、琉球の集落形成が「腰当」思想に基づいて上位から下位へと集落が拡大することを踏まえれば、集落内拝所の位置と住民の宗家・分家関係を正確に把握して集落変容過程を考察することが集落形成仮定の解明にとって重要となるだろう。また、ヒンプンにみられるように特定の場所に集中してみられる地理観については居住者の属性を詳細に検討する必要があるだろうし、宅地割をより詳細に考察しようとするならば地籍図の分析や土地所有者の変遷の検証を欠かすことができない。これらの考察については今後の課題として別稿にて考察をおこないたい。

【付記】

本稿の調査では今帰仁村歴史文化センター館長の仲原弘哲氏、今帰仁村教育委員会の玉城靖氏にご協力とご教示をいただいた。また集落調査では、有銘倫子・上間恵子・鳥袋滝子・玉城菜美路・玉城綾・玉城静香・松本綾子・山城留利子（50音順）の8名の協力をえた。今回の調査は離島での悉皆調査ということもあり、現地の方々の協力がなければなし得ないものである。ここに記し厚く御礼申し上げたい。

現地調査には日本学術振興会2011年度科学研究費（基盤研究A、課題番号22242028、「環東シナ海・環

日本海沿岸域の文化交渉と歴史生態をめぐる学術的研究」, 研究代表者: 野間晴雄)の一部, 2011年度関西大学東西学術研究所助成基金(「八重山地方の文化的特性に関する研究—変容の視点で—」, 研究代表者: 森隆男)の一部, 2011年度関西大学東西学術研究所の一般出張旅費および報酬費の一部を使用した。